

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

5. 広報・社会連携

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2018-04-05 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009016

概観

開館40周年に向けて

2017年に開館40周年を迎えることを記念して、次世代を担う小・中学生の観覧無料化を2017年4月1日からスタートさせることを決定した。来館経験のある小・中学生を増やすことで、「みんぱく」ファンを増やし大学生・大学院生の利用へとつなげるとともに、生涯をとおして利用可能な施設というイメージを定着させ、長期的な入館者数と入館料収入の増加を両立させる計画である。

併せて、2017年度から無料観覧日を9日から4日に変更し、無料対象を本館展示のみとする。展示のテーマと内容のレベルアップ等による入館者の増加を目指すという、博物館としての本来の活動を重視する方向にシフトする。

開館40周年を積極的に発信するため、記念ポスターとチラシを作成したほか、本館オリジナルカレンダーを関係各所に配付した。月刊みんぱくでも、創刊号からの月刊みんぱく総索引を作成し、創刊号からの記事を一望できるようにした。総索引は2016年12月号の付録として配付した。

地域に根ざした広報活動

2015年に開業した大型複合施設エキスポシティ内の各施設と連携し、下記のさまざまな広報活動を行った。

- (1) 吹田市情報発信プラザ「Inforest すいた」で2ヶ月間、「みんぱくフェア」を開催した。ミニ展示や参加型キャンペーンを実施し、本館の認知度向上と集客を図った（入場者数33,810名）。
- (2) 無印良品ららぽーとエキスポシティと、開業1周年記念イベント「みんぱく・無印良品ららぽーと EXPOCITY オープン1周年記念みんぱくツアー」及び国立民族学博物館開館40周年記念特別展「ビーズ」公開記念ツアー「ジュズダマを知ろう プレスレットを作ろう」を実施した（参加者数計32名）。同店内には継続的に本館のチラシや関連書籍を陳列し、無印良品利用者に本館の活動を訴求した。
- (3) 連携協力協定を締結したニフレと、開館記念「ニフレ×みんぱく×アクタス トークセッション『眠りに目覚めよう ～生きものと人の“すみか”と、より良い眠りの工夫～』」を開催した（参加者数51名）。

万博記念公園内の飲食店4店舗との観覧料及び飲食料等の相互割引を継続し、また、同じく公園内の自然観察学習館と連携し、特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」関連イベントとして「プレスレットを作ろう——植物ビーズの魅力」と題し、ワークショップを開催するなど、公園内における利用者の回遊性を高め、集客を図った。

北大阪8市3町の美術館・博物館計53館が参加する「北大阪ミュージアム・ネットワーク」による文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」に参加し、会場提供した。他にもミュージアムぐるっとバス・関西2016に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の活動における中心的役割を担い、注目度を増した千里を起点として発信する広報活動を展開した。

学校教育・社会教育活動

本館研究者の研究成果を幅広い層に社会還元するため、積極的なアウトリーチの講演活動を行った。主に社会人を対象とした生涯教育として、大阪梅田のグランフロント大阪において、連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」を「世界の『台所』」及び「展示キュレーションの誘惑——新しいみんぱくの展示ができるまで」のテーマでそれぞれ7回シリーズで開催した。各講座のうち1回は、本館展示ツアーとすることで、館外での催しを展示観覧につなげることを狙った（参加者数計549名）。大阪阿倍野のあべのハルカス近鉄本店においては、連続講座「カレッジシアター地球探究紀行」に特別協力した（産経新聞主催、20回開催、参加者数計808名）。大阪府高齢者大学の講座（29回開催、参加者数計1,160名）において、引き続き本館教員が講座を担当した。

大学教育の発展に向けて、千里文化財団の協力のもと、「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」制度を継続実施し、高等教育への本館の活用を推進した。平成28年度は、新規申し込み1件（学校法人塚本学院（大阪芸術大学、大阪芸術大学短期大学部、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校））、継続申し込み5件（大阪大学、学校法人 京都文教学園（京都文教大学・短期大学）、同志社大学文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学、学校法人立命館（立命館大学、立命館高等学校、立命館宇治高等学校、立命館守山高等学校、立命館慶祥高等学校））、計2,503人の学生、教職員が来館した。また、本館を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学生・教員のためのみんぱく活用」を本館ウェブサイトに掲載し、98件、3,168名の大学関係者が展示場を利用した。

初等・中等教育への貢献として、近隣の教育委員会と連携して、大阪北摂地域の中学校5校から10名を職場体験として受け入れた。さらに、小・中学校の教諭を対象に、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツール、貸出学習キットなどの紹介を目的としたガイダンスを2回実施し、52団体152名の参加があった。

学校団体（小・中学校、高校、大学）による特別展観覧料の優待措置も継続し、相互観覧による理解度の向上及

び入館者数の増加に貢献した。

インターネットによる広報活動

インターネットによる情報発信とアクセシビリティを一層向上させた。

ホームページに関しては、英語トップページのレイアウト刷新やLINE等ソーシャル・メディアのシェアボタンの設置、CMSセキュリティの向上等リニューアルを重ねた。ホームページの利用者数は、訪問者数 774,417、ページビュー数 2,415,344であった。

メールマガジン（みんぱく e-news）に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月1回継続して発信している（配信数は57,574件）。

ソーシャル・メディアに関しては、海外を含む発信力の強化及び若い女性を中心とした新たな客層の開拓を図るため、新たに公式 Instagram（写真の撮影・加工・共有サービス）ページを開設した。既存のソーシャル・メディアの利用者も順調に増加し、自前の広報メディアとして、着実に地歩を固めている。（Facebook いいね！数 14,109件（合計）、Twitter フォロワー数 34031件、YouTube 総再生回数 14,675回（2016年度））。

マスメディアによる広報活動

特別展「見世物大博覧会」の関連イベントとして、日本文化にも精通しているタレントの浜村淳さんと、MBSの若手アナウンサー 2名、笹原亮二（本館教授・特別展実行委員長）によるトークイベント「みんぱく× MBS ラジオ presents 浜村淳がせまる！驚きと幻想の見世物大博覧会」を開催した（参加者数 446名）。本イベントは、ラジオ番組及びテレビ番組で紹介された他、関連してラジオ番組の生放送に教員が出演したり、特別展や関連イベントのラジオ CM を流したりして、マスメディアの発信力を利用し、社会に向けて広範に本館の活動をアピールする格好の機会となった。

新聞に関しては、新たに朝日小学生新聞で毎週日曜日に本館研究者によるコラム「先住民族を知ろう」を連載した（2016年10月～12月）。毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」や毎日小学生新聞の「みんぱく世界の旅」（2017年3月まで）、京都新聞の「考える舌 みんぱく食の民族誌」（28年6月まで）の連載も継続し、研究者がそれぞれの研究内容を多様な年齢層、地域の読者向けにわかりやすく解説した。また、新たに文部科学教育通信で月2回「国立民族学博物館の収蔵品」を連載し、各研究者が研究内容と本館収蔵資料について解説した。千里ニュータウン FM 放送番組「ごさげん千里 837（やあ、みんな）」も継続している。

プレスリリースも随時発信し、マスメディアに情報提供した（年間36本）。報道関係者との懇談会は、8月を除く毎月、年16回（うち内覧会7回。参加者数182名）開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した。2016年度は、テレビ 20件、ラジオ 71件、新聞 884件、雑誌 72件、ミニコミ誌 177件、その他 155件の各媒体総数1,379件で、本館の活動が紹介された。

研究成果の社会還元及び教育普及活動

研究成果の社会還元として、継続して文化人類学・民族学の最新の研究成果を発信する「みんぱくゼミナール」を12回（参加者数 2,744名）、「映像に描かれる出会いと創造」をテーマに、映画の上映と研究者による解説をおこなうみんぱくワールドシネマを3回（参加者数 877名）、研究部のスタッフと来館者が展示場内でより身近に語り合う「みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう」を40回実施した（参加者数 1,695名）。

さらに、震災復興支援の一環として、研究公演「黒森神楽×雄勝法印神楽 in みんぱく公演」（参加者数426名）、研究公演「城山虎舞 in みんぱく」（参加者数 353名）を実施した。

また、シンポジウムを交えた民族誌映像の上映会「台湾文化光点計画民族誌映画にみる文化への視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より」（参加者数 217名）及び「極北の自然とチュクチの人のびと——みんぱく展示場と映画『ツンドラブック』をつなぐ」（参加者数 226名）を実施した。

特に、展示関連では、新構築した中央・北アジア展示場を広報するため、夏のみんぱくフォーラム 2016「中央・北アジアを駆けめぐる」と題し、映画会、コンサートなどの新展示に関連したイベントを6月～8月にかけて合計15回開催し、延べ11,865名の参加があった。同じく新構築したアイヌの文化展示場を広報するため、冬のみんぱくフォーラム2017「アイヌ展示チアシカラ！」と題し、公演、実演などの新展示に関連したイベントを12月～2月にかけて合計13回開催し、延べ8,040名の参加があった。これらの事業に関連して展示場内でのギャラリートークを実施し、新展示をより多くの来館者に紹介することができた。

また、特別展・企画展・展示イベントに関連するワークショップ、ゼミナール、ウィークエンド・サロン、上映会、公演など多数のイベントを開催し、展示の理解を深めることに寄与した。

これらの活動は、みんぱくカレンダーやチラシを制作し、関係諸施設を通じて配布したほか、広報誌『月刊みんぱく』を国立民族学博物館友の会会員に配付したり、全国の研究機関、大学等に寄贈したりすること等によって、広く情報発信した。視覚障がい者向けの同誌音訳版も並行して製作・配付した。

来館者サービスを向上させるため、スマホチケットサービス提供会社及び前売券の販売代理店を見直した結果、新たに特別展等期間限定前売券の販売も可能となり、利用者の手数料も抑えることができた。また、社会の節電対策として開始した夏季無料キャンペーンを28年度も実施し、8月の一ヶ月間高校生以下と65歳以上の方の観覧料を無料とした。

その他の活動

本館敷地内の案内誘導サインを、多様な来館者がアクセスしやすく快適に観覧できるよう視覚障害者を含めて検証実験をおこなったうえで視認しやすい配色に工夫した他、ベビールームやAED等の必要な情報が必要な人に伝わるようサインを全面的に見直した。

高齢者や身体が不自由な方等多くの方が快適に来館できるよう、特別展会期中に大阪モノレール「万博記念公園駅」から本館まで無料のシャトルバスを運行した。

今後の課題

平成29年度から小・中学生の無料化が始まる。さまざまな広報機会を捉えて無料化を積極的に発信していく。すでに学校団体向けに遠足・校外学習ガイドランスの案内状の送付を従来の約200件から約5,000件に広げるなどPRに努めているが、各自治体の教育委員会との連携を強化するなど小・中学校とのさらなる協力体制を構築する。また、無料観覧日の見直しにより、一時的には入館者数の減少が危惧されるが、小・中学生の無料化をはじめ、展示の魅力を一段と高めることによって、長期的視野から本館の存在価値を高めていく。

研究成果の社会還元や教育普及活動においては、長年継続してきた既存の活動に加え、各種研究プロジェクトや外部資金による研究の成果を還元する活動を促進したり、近隣諸施設と連携した活動を積極的に企画・実施したりするなど、さらなる新規事業の検討が必要である。

国立民族学博物館要覧2016

- ・和文要覧 2016年7月発行
- ・英文要覧 2016年12月発行

ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp/> (2017年3月31日現在)

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

提供している主な情報は以下の通り。2016年度の訪問件数は774,417件。

・研究活動

研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

・博物館展示・事業活動

本館展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・ゼミナール・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

・大学院教育

総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。

・データベース

本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんなく e-news」を発行し、毎月開催している「みんなくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんなく映画会」「特別展」などのお知らせを、月1回電子メールで配信している。2016年度の配信数は57,574部。

報道

●報道関係者との懇談会

2016年4月21日	10社（13名）	研究公演「黒森神楽×雄勝法印神楽 in みんなく公演」、連続講座「みんなく×ナレッジキャピタル——世界の『台所』」、新任紹介ほか
5月19日	9社（17名）	企画展「ワンロード——現代アポリジニ・アートの世界」、みんなく映画会「映画で知る中央・北アジア」、音楽の祭日2016 in みんなくほか
6月16日	14社（20名）	本館展示リニューアル完成、中央・北アジアを駆けめぐり——夏のみんぱくフォーラム2016関連コンサート&トークイベント、展示ツアー（企画展「ワンロード——現代アポリジニ・アートの世界」、中央・北アジア展示場、アイヌの文化展示場）ほか
7月21日	9社（12名）	特別展「見世物大博覧会」、企画展「順益台湾原住民博物館所蔵・学生創作ポスター展 台湾原住民族をめぐるイメージ」、みんなくワールドシネマ今年度テーマ「映像に描かれる〈出会いと創造〉」、みんなく秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス、身装画像データベース〈近代日本の身装文化〉、第10回文化財保存修復学会業績賞受賞について、新任紹介ほか
9月7日	19社（29名）	特別展「見世物大博覧会」報道・出版関係者向け内覧会
10月13日	6社（7名）	「人間ポンプ 安田里美 浅草木馬亭公演 上映会」「伊勢大神楽の獅子舞と放下芸——伊勢大神楽講社による総舞」、年末年始展示イベント「とり」、公開講演会「私たち人類はどこへ行くのか？ スイカで踊る、クジラを祭る——生き物と人 共生の風景」、上映会・シンポジウム「民族誌映画にみる文化への視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より（台湾文化光点計画）」、公開フォーラム「世界の博物館2016」ほか
11月17日	8社（14名）	企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」、冬のみんぱくフォーラム2017「アイヌ展示チアシリカラ！（アイヌの展示をリニューアルしました）」、みんなく公演「アイヌ民話人形劇 ふんだりけったりクマ神さま」、アイヌの伝統的儀式「ミンパク オッタ カムイノミ（みんなくでのカムイノミ）」、みんなく映画会・みんなくワールドシネマ「パレードへようこそ」、国際公開セミナー「極北の自然とチュクチの人びと——みんなく展示場と映画『ツンドラブック』をつなぐ」ほか
12月15日	11社（15名）	学術潮流サロン「人と動物——つながりとその変化」、みんなく公演「トンコリ×ウポポ——アイヌ音楽ライブ by OKI / MAREWREW」、フォーラム関連イベント「アイヌ・アートにふれる日——木彫の可能性」、みんなく映画会・みんなくワールドシネマ「幸せのありか」、展示ツアー（年末年始展示イベント「とり」）ほか
2017年1月19日	8社（11名）	開館40周年記念事業について、開館40周年記念特別展「ピース——つなぐ・かざる・みせる」、国際シンポジウム「エイジフレンドリー・コミュニティ——変わりゆく人生を包みこむまち」。展示ツアー（企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」）ほか
2月16日	9社（14名）	小・中学生の本館展示・特別展示の観覧無料化について（開館40周年記念事業）、本館展示新構築完成記念式典・須藤健一館長退任記念講演会、アイヌの伝統的家屋「チセ」の屋根葺き替えについて、研究公演「城山虎舞 in みんなく」、連続講座「みんなく×ナレッジキャピタル——世界のピース」、国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼」、みんなく春の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス、公開講演会「恵（めぐ）みの水、災（わざわ）いの水——川、

		湖、海」ほか
3月8日	15社（20名）	開館40周年記念特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」報道・出版関係者向け内覧会
3月22日	8社（13名）	本館展示新構築完成記念式典・須藤健一館長退任記念講演会

●新聞等報道件数

2016年度は、テレビ20件、ラジオ71件、新聞884件、雑誌72件、ミニコミ177件、他155件、計1,379件の報道があった。

月刊みんぱく

4月号	（第463号）	2016年4月1日発行	特集「体育会系」
5月号	（第464号）	2016年5月1日発行	特集「たまり場」
6月号	（第465号）	2016年6月1日発行	特集「ワンロード——現代アボリジニ・アートへの招待」
7月号	（第466号）	2016年7月1日発行	特集「変貌する中央・北アジア」
8月号	（第467号）	2016年8月1日発行	特集「『負』の遺産」
9月号	（第468号）	2016年9月1日発行	特集「見世物大博覧会」
10月号	（第469号）	2016年10月1日発行	特集「造る人と博物館」
11月号	（第470号）	2016年11月1日発行	特集「交流の場としてのアイヌ文化展示」
12月号	（第471号）	2016年12月1日発行	特集「人類学における映像」
1月号	（第472号）	2017年1月1日発行	特集「とり」
2月号	（第473号）	2017年2月1日発行	特集「災害を越えて」
3月号	（第474号）	2017年3月1日発行	特集「ビーズ」

みんぱくゼミナール

第455回 夷酋列像を考える【特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる 人・物・世界」関連】

2016年4月16日

講師 右代啓視（北海道博物館 学芸主幹）
内田順子（国立歴史民俗博物館 准教授）
日高真吾

受講者 288名

内容 特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる 人・物・世界」の概要と、夷酋列像が描かれるきっかけとなったクナシリ・メナシの戦い、フランスにおけるアイヌ文化の関心について実行委員メンバーがリレー形式で紹介し、夷酋列像の歴史的、文化的な意義について考えた。

第456回 ヒンドゥー聖地と巡礼の現在

2016年5月21日

講師 松尾瑞穂

受講者 228名

内容 インドには古代からたくさんの聖地があり、各地から巡礼者が集ってきた。近年では、交通網やメディアの発達、観光化、世界遺産化等により、巡礼のスタイルにも変化が見られる。今日の聖地の変化について考えた。

第457回 ポスト移行期モンゴルの文化変容【新展示（中央・北アジア展示）関連】

2016年6月18日

講師 小長谷有紀

受講者 226名

内容 モンゴルは世界で2番目に社会主義国となり、その後市場経済へ移行、現在はポスト社会主義期を経て、ポスト移行期を迎えている。新展示ではこうした歴史が生活や信仰に与えた影響を表したことを、紹介

した。

第458回 カザフ女性たちの結婚と子育て【新展示（中央・北アジア展示）関連】

2016年7月16日

講師 藤本透子

受講者 175名

内容 中央アジアのカザフスタンでは、旧ソ連からの独立を経て、結婚と子育てに大きな変化がみられる。近代、伝統、イスラームという複数の価値観のあいだで揺れ動く家族のあり方について考えた。

第459回 飛ばねえカワウは、ただのカワウだ——鵜飼研究の魅力を語る

2016年8月20日

講師 卯田宗平

受講者 157名

内容 鵜飼のカワウはなぜ飛んで逃げないのか。どのような魚が獲れるのか。鵜飼にかかわるさまざまな疑問を切り口に、中国と日本の自然環境や食文化の違い、そして鵜飼研究の魅力について説明した。

第460回 軽業の系譜と民俗芸能——特別展「見世物大博覧会」から【特別展「見世物大博覧会」関連】

2016年9月17日

講師 笹原亮二

受講者 242名

内容 古来演じられてきた軽業は、その後田楽や大神楽に引き継がれ、やがてそれに魅了された各地の人びとが自ら演じ、民俗芸能として伝来するに至った。そうした軽業の系譜と民俗芸能について考えた。

第461回 言葉から文化を考える——「アラブ的思考様式」再考

2016年10月15日

講師 西尾哲夫

受講者 186名

内容 名著『風土』のなかで和辻哲郎はアラブ人を「服従的、戦闘的の二重の性格」をもった「砂漠の人間」と評しているが、このまなざしは日本人の中東世界観に依然として受けつがれている。アラブ遊牧民の日常的世界観を彼らの言葉を分析することで再考した。

第462回 博物館の中の古代アメリカ文明

2016年11月19日

講師 鈴木 紀

受講者 175名

内容 マヤ、アステカなどの古代アメリカ文明は博物館でどのように展示されているのだろうか。これらの文明は消滅した過去の文明だろうか、それとも、現代にも影響を及ぼしているのだろうか。主に北米と中南米諸国の博物館を比較しながら、古代文明展示が発するメッセージを探った。

第463回 アイヌ語はどこから来たのか。そして、どこへ行くのか。【新展示（アイヌの文化展示）関連】

2016年12月17日

講師 中川 裕（千葉大学 教授）

齋藤玲子

受講者 326名

内容 アイヌ語と日本語の歴史的な関係、アイヌ語はどのような言語と似ているのかなどということについて言語学的に解説するとともに、現在の保存・継承の取り組みや将来への展望についてもお話した。あわせて「アイヌの文化」新展示で見る・聞くことのできるアイヌ語を紹介した。

第464回 アイヌ文化と観光【新展示（アイヌの文化展示）関連】

2017年1月21日

講 師 齋藤玲子

受講者 226名

内 容 アイヌの工芸品販売や舞踊公演は明治・大正時代からおこなわれていた。かつては「文化を売り物にする」ことへの批判もあったが、観光が文化継承を支えてきた面もあり、現在は経済的自立や文化発信の手段としても評価されている。歴史を踏まえて、さまざまな事例を紹介した。

第465回 津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録【企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」関連】

2017年2月18日

講 師 竹沢尚一郎

受講者 229名

内 容 企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」は、被災地のひとつである岩手県大槌町に焦点を当て、被災前のまちの姿と、被災直後のまちの風景、そして被災直後から半年間、まちの各地で実現された人びとの助け合いの様子を再現したことをお話しした。

第466回 人間にとってビーズとは何か？——特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」から

【開館40周年記念特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」関連】

2017年3月18日

講 師 池谷和信

受講者 286名

内 容 わずか直径が数ミリのものからつくりだされるビーズの世界。これは、10万年前に生まれて現在では世界中にひろがっている。美しさに秘められた世界各地の人びとの知恵を紹介した。

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

第419回 2016年4月3日 「アフリカの」布はどこから来たか

講 師 三島禎子

参加人数 45人

内 容 アフリカらしさがにじみ出る工業製プリント布は、誰がどのように創りだしたもののなのか。今日にいたるまでの変遷を、布を取引きする商人の視点から話し、アフリカと世界のつながりを考えた。

第420回 2016年4月10日 スイスにおける高齢者のウェルビーイングと地域の癒し文化

講 師 鈴木七美

参加人数 21人

内 容 4つの公用語をもつスイスでは、各地の特徴的な食文化や養生の習慣がみられる。様々なヒーリング・アートが実践されてきたアッペンツェルやエメンタール地方をとりあげ、高齢者たちが日々の生活で続けている癒しや養生の文化とウェルビーイングについて考えた。

第421回 2016年4月17日 兵士の写真は語りかける——第二次エチオピア戦争のイタリア兵

講 師 川瀬 慈

参加人数 26人

内 容 1930年代半ばの第二次エチオピア戦争の際、イタリア軍が現在のエチオピアとエリトリアにおいて撮影した写真を紹介し、当時の諸民族やイタリア兵の生活について考察した。

第422回 2016年4月24日 夷酋列像展をめぐる旅

講 師 日高真吾

参加人数 85人

内 容 夷酋列像は、クナシリメナシの戦いで、立ち上がったアイヌに戦いをやめるよう説得したアイヌの有力者12人を描いたものである。今回は夷酋列像をめぐる人の交流、物の交易、そして当時の日本人の世界観について紹介した。

第423回 2016年5月1日 万博とみんなくアンド大阪・日本の将来

講師 出口正之

参加人数 40人

内容 近くにEXPOCITY（「万博都市」の英訳）が誕生している。みんなくと万博も切っても切れない関係にある中、猪瀬直樹元東京都知事が2025年大阪万博開催を強力に支持し、「フィランソロピー首都構想」を発表した。万博とみんなくの不思議な縁を考えながら大阪と日本の将来を考えた。

第424回 2016年5月8日 グローバル化の中のアラビア語と中東地域の人びと

講師 西尾哲夫

参加人数 37人

内容 イスラームの聖典「クルアーン（コーラン）」はアラビア語によって書かれている。クルアーンとアラビア語の関係が、イスラーム文明の基盤を作ってきた。人間の移動・移住やIT化によって、アラビア語が作り出す公共的なコミュニケーション空間はおおきく変化している。言葉の面からアラブの民主化について考えた。

第425回 2016年5月15日 南太平洋のサンゴ島を掘る

講師 印東道子

参加人数 24人

内容 南太平洋の小さな島に住む人たちは、いつ、どこからやってきて、どんな生活をしていたのか。それを雄弁に語る証拠が土の中に眠っていた。ミクロネシアのファイス島で行った発掘調査から見えてきた島の暮らしを紹介した。

第426回 2016年5月22日 ネパールの楽師ガンダルバ——1982年の映像を手がかりに

講師 南 真木人

参加人数 37人

内容 もと不可触カーストとされ、サランギという弓奏楽器の弾き語りを生業としてきた楽師ガンダルバ。現在彼らはどのように暮らしをたて、音楽と関わっているのか。34年前の映像も用いながら、ガンダルバの動態を考えた。

第427回 2016年6月26日 オーストラリア先住民アボリジニのアートとワンロード

講師 丹羽典生

参加人数 71人

内容 オーストラリア西部の砂漠には、世界で最も長いとも言われる1850キロメートルの長さの一本道がある。その道を題材としたアボリジニ・アートについて、アボリジニの生活の変化に触れつつ紹介した。

第428回 2016年7月3日 言語と文化と翻訳——なぜ漱石は“I love you”を訳さなかったのか

講師 吉岡 乾

参加人数 62人

内容 文学作品などが、多くの言語に翻訳されて世界中で出版されることは、古今にわたって見られる。時代が下って世界は更に狭くなり、翻訳・通訳の出番が増えた。ここで改めて、ある言語の表現を別の言語の表現にすると伴う問題点を考えた。

第429回 2016年7月10日 極北の民チュクチの暮らし

講師 池谷和信

参加人数 46人

内容 ロシアの北東部にチュクチの人びとが暮らしている。彼らは、海岸部ではクジラやセイウチなどの海獣類の狩猟、内陸部ではトナカイ飼育などを伝統的な生業として従事してきた。ここでは、過去100年間のなかで社会主義体制という国家の変化とチュクチの暮らしとのかかわり方を紹介した。

第430回 2016年7月17日 メルボルン中華街の春節

講師 河合洋尚

参加人数 43人

内容 オーストラリアのメルボルンには、南半球最大といわれる中華街があり、春節（旧正月）時には龍舞などのイベントで賑わう。メルボルン中華街の今を、春節を中心に紹介した。

第431回 2016年7月24日 ウズベキスタンの人々の暮らしと食文化——遺跡の発掘調査から探る

講師 寺村裕史

参加人数 46人

内容 6月に中央・北アジア展示が新しくオープンした。本サロンでは、新しくなった展示場の紹介も兼ねつつ、ウズベキスタンの都市遺跡の発掘調査で見つかったパン焼き窯や部屋跡と、現代の窯や建物とを比較しながら、現地の人々の暮らしや食文化について紹介した。

第432回 2016年7月31日 中央アジアの手工芸

講師 藤本透子

参加人数 103人

内容 新展示では、中央アジアの人たちが作り、日常生活で使用しているものを数多く公開する。敷物や壁掛け、鞭などの各世帯で作られてきたものから、楽器や陶器などの工房で製作されているものまで、市場経済化のなかで変化してきたもの作りについて紹介した。

第433回 2016年8月7日 「無視覚流」の極意を求めて——ユニバーサル・ミュージアムの新展開

講師 廣瀬浩二郎

参加人数 24人

内容 7月2日から開催された兵庫県立美術館の企画展「つなぐ×つつむ×つかむ」では、来館者がアイマスクを着けて、彫刻に触れる展示がおこなわれた。本展に全面協力した話者が、この展示の意義をユニバーサル・ミュージアムの立場から紹介した。

第434回 2016年8月14日 デジタル時代の原住民イメージ

講師 野林厚志

参加人数 48人

内容 情報産業がめざましい発展を遂げる台湾では、若い世代が豊かな構想力や創造力を発揮しデジタルコンテンツの制作に取り組んでいる。こうした創作活動が台湾における民族間関係にも深く関わっていることを紹介した。

第435回 2016年8月21日 訪ねてみよう、手話の世界！

講師 飯泉菜穂子

参加人数 14人

内容 「手話って身振り・手振りだから語源がはっきりしていてわかりやすいですよね？」「手話って世界共通なんですよ？」答えは「いいえ」である。近くて遠いワンダーランド、手話の世界を言語・コミュニティ・異文化をキーワードに案内した。

第436回 2016年8月28日 イタリア人と食

講師 宇田川妙子

参加人数 37人

内容 イタリアというと「食」というイメージがあり、彼らも自分たちの食に誇りをもっている。昨年、ミラノ万博のテーマは食であり、スローフード運動の発祥もイタリアであった。なぜ、イタリアでは食との関係がそれほど緊密なのか、彼らの生活や歴史の中から探った。

第437回 2016年9月4日 民博所蔵「ジョージ・ブラウン・コレクション」の来歴をたどる

講師 林 勲男

参加人数 15人

内 容 当館は、キリスト教宣教師ジョージ・ブラウンが、南太平洋の島々で収集した約3,000点の民族誌資料を所蔵している。1917年に彼が亡くなった後、コレクションは売却され、複数の博物館を転々とし、その間に分散してしまった資料もある。コレクションの来歴をたどり、当館で新たに始まったプロジェクトについて紹介した。

第438回 2016年9月25日 宗教と文字から見た中国——中国展示のひとつの見方

講 師 横山廣子

参加人数 47人

内 容 中国は多民族で構成され、文化も多様である。しかし、文字と宗教を通して全体を見わたすと、漢字を発達させた中国文明圏のほかに、いくつかの文明の潮流が中国をかたちづくってきたことがわかる。中国における文明・文化の展開と交流を鳥瞰図的にとらえてみた。

第439回 2016年10月2日 ベトナムの民族観光——マイチャウの白タイ村落

講 師 檜永真佐夫

参加人数 24人

内 容 マイチャウは1990年代以来、ベトナムにおける代表的な少数民族観光地として発展してきた。なんと言ってもそこでの魅力は、白タイ族の高床式家屋にホームステイできることである。マイチャウに行ってももしかすると聞けない、現地白タイ族の歴史と文化について紹介した。

第440回 2016年10月9日 魅せるモノ・魅せられるモノ——見世物のおもしろさを巡って

講 師 笹原亮二

参加人数 44人

内 容 9月8日から開催の特別展「見世物大博覧会」の全体的な内容について、紹介した。展示全体は、人が自らのカラダを用いて演じる軽業・曲芸・見世物小屋の芸・芝居仕立ての芸などと、人間以外のモノを用いた籠細工・一式細工・生人形・菊人形・動物などから構成されている。それらを通じて、日本の見世物の全体像を考えた。

第441回 2016年10月16日 人間にとってカフェとは何か

講 師 太田心平

参加人数 27人

内 容 コーヒーの歴史とともに発達したカフェの文化。サロンとして花開いた過去から、ノマド・ワーキング（特定の場所にしばられない仕事や勉強の仕方）の場としての現在までの歴史や、地域ごとに多様な実情を紹介し、人間にとってカフェとは何か、参加者と考えた。

第442回 2016年10月23日 南米アンデス文明「ヘビ・ジャガー神官の墓」の発見

講 師 關 雄二

参加人数 38人

内 容 日本・ペルー合同考古学調査団は、2015年9月に南米ペルー国の北高地に位置するパコパンパ遺跡で、紀元前600年頃にさかのぼる、金製首飾りと、ヘビとジャガーを象った土器を副葬した墓を発見し、世界的に話題となった。その発見の過程と、学術的意義を紹介した。

第443回 2016年10月30日 食からみる中国文化および世界とのつながり

講 師 韓 敏

参加人数 45人

内 容 「民以食為天」という言葉は、中国社会における食の重要性と、人類社会における食のもつ普遍性を語っている。食べものや加工道具などの展示品から、「食」がいかに人と自然、人と人、人と神、そして異なる民族と文明をつないできたのかを考えた。

第444回 2016年11月6日 アンケートが語るビデオテークとみんぱく電子ガイド

講師 山本泰則

参加人数 12人

内容 長年展示場で活躍してきたビデオテークとみんぱく電子ガイドのリニューアルの時期をむかえている。今回は、来館者がビデオテークとみんぱく電子ガイドをどう見ているか、今年とったアンケートを通して見える姿について、紹介した。

第445回 2016年11月13日 アラブ人キリスト教徒の視点からみた中東情勢

講師 菅瀬晶子

参加人数 52人

内容 2010年末に起こった「アラブの春」以降、中東各地では政変や紛争が相次ぎ、スンナ派ムスリム以外の宗教的マイノリティの存在がクローズアップされるようになった。今回はユダヤ人国家イスラエルに住んでいるアラブ人キリスト教徒たちに焦点を当て、彼らがパレスチナ・イスラエル問題やイラク・シリア情勢をどのようにみているのか、彼ら自身に起こっている変化をまじえて紹介した。

第446回 2016年11月27日 博物学と見世物——珍獣幻獣大集合

講師 山中由里子

参加人数 81人

内容 駱駝、象、虎、鰐、駝鳥など、外国からもたらされた珍しい動物は江戸の人びとの好奇心を刺激し、見世物の対象となった。一方、人魚のミイラは、日本から輸出され欧米でも見世物として大流行した幻獣である。博物学と娯楽のこの境界には、たこ娘にかに男といった、妖しいハイブリッド獣たちも生息している。

第447回 2016年12月11日 民族音楽学の考え方

講師 寺田吉孝

参加人数 30人

内容 民族音楽学は1950年代に北米で生まれた比較的新しい研究分野で、世界中の音楽を研究の対象としている。一体どのように研究が行われているのか、この分野の成り立ち、基本的な考え方、調査方法について紹介した。

第448回 2016年12月18日 先住民とアート——アイヌとカナダ先住民の比較

講師 岸上伸啓

参加人数 49人

内容 世界各地の先住民は歴史的に培ってきた技能を用いてさまざまな美術・工芸品を創り出してきた。カナダの北西海岸先住民によるトーテムポールや仮面、木箱、版画の制作とアイヌの木彫り彫刻品やタペストリー、衣類の制作を比較し、その意義について検討した。

第449回 2016年12月25日 みんぱくの資料をあつめてみよう——データベースを活用した仮想展示の作り方

講師 丸川雄三

参加人数 20人

内容 みんぱくの標本資料は、そのほとんどがホームページ上で公開されている。展示場で気になる資料を見つけたら、もっと詳しい情報を標本資料データベースで調べることができる。使いこなすと自分の好きなテーマで標本資料をあつめて自分だけの展示を作ることなどもできるようになる。

第450回 2017年1月8日 アマゾンの聖人祭——在来の伝統とキリスト教の融合

講師 齋藤 晃

参加人数 15人

内容 南米ボリビア・アマゾンのモホス地方には、在来の踊りや音楽を取り入れたカトリックの聖人祭が伝わっている。サン・イグナシオの町の祭礼はとりわけ盛大で、ユネスコの無形文化遺産に指定されている。モホス地方の聖人祭の現状を紹介し、歴史を振り返った。

第451回 2017年1月15日 日本の鵜飼文化は誰が守るのか

講師 卯田宗平

参加人数 13人

内容 鵜飼とはウミウやカワウを使って魚を捕る漁法である。日本各地の鵜飼の現場では船頭さんの高齢化問題や、鵜飼道具の作り手不足といった問題がある。なかでも、野生のウミウを捕獲する技術の継承は無視できない問題である。ここではウミウ捕獲技術から鵜飼文化の今後について考えた。

第452回 2017年1月22日 東日本大震災の教訓

講師 竹沢尚一郎

参加人数 29人

内容 甚大な被害を出した2011年の東日本大震災。その一方で、被災者たちの沈着で助け合いの精神に満ちた行動は世界中で賞賛を受けた。なぜ、彼らはそのような行動をとることができたのか。私たちはそこから何を教訓として受け取るべきなのか。企画展に合わせて考えた。

第453回 2017年2月5日 アイヌの衣文化

講師 齋藤玲子

参加人数 73人

内容 アイヌの衣文化は明治時代から研究者の関心の的となり、多くの実物資料や文献が残されてきた。しかし近年、作り手による研究や、織物の素材や技法に注目した調査により、新たな知見が得られている。既存の研究の概要とともに、最近の成果について紹介した。

第454回 2017年2月12日 博物館資料をソースコミュニティと再会させる

講師 伊藤敦規

参加人数 16人

内容 民族誌資料を作った人、使った人、その子孫（ソースコミュニティ）を博物館に招待し、自分たちの文化に関係する資料を見たり、触れたり、文字記録を確認してもらって研究を行っている。時間と空間を超えた「再会」のねらい、作業の進め方、得られた結果などを紹介した。

第455回 2017年2月19日 アイヌの信仰・儀礼

講師 北原次郎太

参加人数 92人

内容 アイヌ民族の信仰と儀礼からは、様々な祭具類などのアイヌ文化の特色と、日本をはじめとする周囲の文化との共通点が見えてくる。この講座では「カムイの観念」や「死生観」など、アイヌ民族の信仰を知るための基本的な事柄について解説した。

第456回 2017年2月26日 展示場のなかの資料を「まもる」工夫

講師 園田直子

参加人数 27人

内容 展示場には、観覧者の目につかないところにも、資料を「まもる」ための工夫がたくさんある。光の影響から資料をまもるフィルム、湿度を一定にたもつ調湿効果のあるケース、銀製品を変色させないフィルター付きケース、などなど。保存の目で、展示場を回った。

第457回 2017年3月5日 イスラームとムスリムの関係性

講師 相島葉月

参加人数 41人

内容 人類学的なイスラーム研究を行っている者は、自分の研究対象がイスラームなのか、ムスリムなのかという問いに直面する。イギリス人ムスリムによってYouTubeにアップロードされたファレル・ウィリアムスの『ハッピー』のパロディー版より、その違いについて検討した。

第458回 2017年3月12日 新構築展示のころとかがち

講師 須藤健一

参加人数 96人

内容 新構築展示は、アイヌの文化展示のチセ（伝統家屋）の屋根替えて完了する。フォーラム、グローバル、ハンズオンなど、新しいコンセプトによる展示の出来栄やこの展示刷新のねらいとそのすがたについて考えた。

研究公演

「黒森神楽×雄勝法印神楽 in みんなく公演」

2016年5月29日

司会 日高真吾

解説 林 勲男、小谷竜介、神田より子

出演 黒森神楽衆、雄勝法印神楽衆

参加者 426名

内容 岩手県、宮城県の神楽で、国の重要無形民俗文化財に指定されている黒森神楽、雄勝法印神楽の公演を行った。また、それぞれの神楽を調査している研究者も交えて、震災の影響や地域の復興に向けた活動などについてパネルディスカッションを行った。

「アイヌ民話人形劇 ふんだりけったりクマ神さま」

2016年12月3日

司会 齋藤玲子

解説 遠州まさき、秋辺日出男、澤井和彦

出演 平澤隆二、河田泰子、渡辺かよ、平久美子、西田正男、平加代子

参加者 594名

内容 2012年にオープンした阿寒湖アイヌシアター「イコロ」で上演するために共同制作された1作目の人形劇を上演した。欲ばりなクマ神がほかのカムイたちから懲らしめられ、その後、人間によって撃ち取られ、送り儀礼でカムイの国へ帰るという物語。人間と動物との関係をわかりやすく楽しく理解し、口承文芸がアイヌの世界観や戒めを伝えてきたことを紹介した。

「トンコリ×ウポポ 2017——アイヌ音楽ライブ BY OKI / MAREWREW」

2017年1月29日

司会 齋藤玲子

出演 OKI (オキ)、MAREWREW (マレウレウ)

参加者 739名

内容 樺太や北海道北部で演奏されてきたトンコリという弦楽器（「五弦琴」とも呼ばれる）を復活させ、アイヌ音楽をひろめてきたミュージシャンと、輪唱が特徴的な伝統歌・ウポポを再現する女性グループを招き、アイヌ音楽の地域性や伝統を基盤とした現代の文化活動の一端を紹介した。

「城山虎舞 in みんなく」

2017年3月19日

司会 日高真吾

解説 橋本裕之、中川 眞、笹山政幸

出演 城山虎舞

参加者 353名

内容 岩手県の三陸沿岸部を代表する郷土芸能「虎舞」の公演を行った。今回は広く分布する虎舞の一つ、「城山虎舞」を招へいし、城山虎舞の出演者や岩手の芸能支援に尽力した協力者とともに、芸能の継承のあり方をテーマとしたディスカッションを開催し、地域文化の重要性について考えた。

みんなく映画会

2016年6月12日

映画で知る中央・北アジア【新展示（中央・北アジア展示）関連】

「デルス・ウザーラ」

司会 藤本透子

解説 佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室 主幹）

参加者 252名

内容 新しくなった中央・北アジア展示を広く知っていただくため、展示のテーマに関連した映画の上映会を、研究者の解説付きで4回にわたって実施。第1回は、手つかずの森の中で自然とともに生きる先住民族と、ロシア人探検家との友情を、美しい映像美で描いたソ連・日本合作映画「デルス・ウザーラ」を上映。解説ではそこに描かれた虚実を解きほぐし、20世紀初頭の極東ロシアの先住民族たちの現実を見つめた。

2016年6月25日

映画で知る中央・北アジア【新展示（中央・北アジア展示）関連】

「モンゴル」

司会 藤本透子

解説 小長谷有紀

参加者 249名

内容 新しくなった中央・北アジア展示を広く知っていただくため、展示のテーマに関連した映画の上映会を、研究者の解説付きで4回にわたって実施。第2回は、ロシア人のセルゲイ・ボドロフが監督、主役に日本人の浅野忠信、準主演に中国人の孫紅雷が扮し2007年に公開された「モンゴル」を上映。解説では他のチンギス・ハーン映画と比較し、本作におけるグローバルな異文化理解について考えた。

2016年7月9日

映画で知る中央・北アジア【新展示（中央・北アジア展示）関連】

「山嶺の女王 クルマンジャン」

司会 藤本透子

解説 吉田世津子（四国学院大学 教授）

参加者 427名

内容 新しくなった中央・北アジア展示を広く知っていただくため、展示のテーマに関連した映画の上映会を、研究者の解説付きで4回にわたって実施。第3回はロシア帝国が中央アジアを次々と勢力下に治めていった時代に、ひとりの女性として苦悩しながらも政治手腕を発揮したクルマンジャン・ダトカの生涯を描いたキルギス（クルグズスタン）映画「山嶺の女王 クルマンジャン」を上映。解説では映画の背景について説明し、みんなくの展示や映像資料との関連についても紹介した。

2016年7月18日

映画で知る中央・北アジア【新展示（中央・北アジア展示）関連】

「くるみの木」

司会 小長谷有紀

解説 佐野伸寿（映画製作者）、藤本透子

参加者 452名

内容 新しくなった中央・北アジア展示を広く知っていただくため、展示のテーマに関連した映画上映会を、研究者の解説付きで4回にわたって実施。第4回はカザフスタンの人びとの日常を、風刺のきいたコメディ・タッチで生き生きと描いた「くるみの木」を上映。解説ではカザフスタンやカザフ人の暮らしについてお話しし、関連するみんなくの中央・北アジア新展示についても紹介した。

2016年9月22日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈出会いと創造〉

「禁じられた歌声」

司 会 鈴木 紀

解 説 竹沢尚一郎

参加者 378名

内 容 〈出会いと創造〉をキーワードに、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施。第34回はフランス・モーリタニア合作、イスラーム武装勢力に占拠されたマリ共和国の古都トンプクトゥを舞台とする「禁じられた歌声」を上映。過酷な状況の中での人びとの静かな抵抗と自由への叫びをとおして、今、世界で起きている出来事について考えた。

2016年11月12日、13日

台湾文化光点計画上映会・シンポジウム

民族誌映画にみる文化への視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より

「虹の物語」

「靈山」

「受け継ぐ人々」

「僕らの時代は」

「怒 大阪浪速の太鼓集団」

司会・解説

野林厚志、川瀬 慈

パネルディスカッション

比令亞布（「虹の物語」監督）

蘇弘恩（「靈山」監督）

李佳玲（「靈山」プロデューサー）

ロッセッラ・ラガツイ（「受け継ぐ人々」監督）

川瀬慈（「僕らの時代は」監督）

寺田吉孝（「怒 大阪浪速の太鼓集団」監修）

野林厚志

参加者 217名

内 容 台湾原住民の映像作家が、自らの文化や社会の変容をテーマに制作した民族誌映画の上映を行い、さらに台湾との比較の見地から、ノルウェーの先住民や、日本、エチオピアのマイノリティの音楽文化をテーマにした民族誌映画の上映を行った。あわせてシンポジウムを開催し、それぞれの主題に関する映像のアプローチについて制作者間で論議を行った。

2016年12月4日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈出会いと創造〉

「パレードへようこそ」

司 会 松尾瑞穂

解 説 吉田俊実（東京工科大学 教授）

参加者 203名

内 容 〈出会いと創造〉をキーワードに、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施。第35回は1984年サッチャー政権下のイギリスを舞台に、ストライキを敢行する炭坑労働者と、彼らを支援するゲイグループが、理解しあい結束するまでを描いたイギリス映画「パレードへようこそ」を上映。異なった環境や立場にいる人びとが、偏見や差異をどのように乗り越え、交流することが出来るかを考えた。

2016年12月23日

人間文化研究機構北東アジア地域研究推進事業 国立民族学博物館拠点 国際公開セミナー

極北の自然とチュクチの人びと——みんなく展示場と映画『ツンドラブック』をつなぐ

司 会 池谷和信

総合討論 アレクセイ・ヴァフルシェフ（「ツンドラブック」監督）

呉人徳司（東京外国語大学 准教授）

山田孝子（金沢星稜大学 教授）

- 池谷和信
 参加者 226名
 内容 新しくなった中央・北アジア展示場の資料が収集された場所と同じ地域の民族誌映像を上映し、チュクチの文化をより深く紹介した。また、モスクワから映画の監督を招いて、映画の背景について話をうかがった。

2017年2月11日

- みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈出会いと創造〉
 「幸せのありか」
 司会 菅瀬晶子
 解説 信田敏宏
 参加者 296名
 内容 〈出会いと創造〉をキーワードに、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施。第36回は民主化へと移行する時代を背景に、脳性麻痺を患っている少年の成長を描いたポーランド映画「幸せのありか」を上映。自分の意思と感情が明確にも関わらず、家族にも伝えられないでいる青年の視点をおとして、健常者の障害者への理解について考えた。

博物館社会連携

●学習キット「みんなく」

学校機関や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として学習キット「みんなく」の貸し出しを実施している。みんなくは世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2017年3月現在で14種類23パックを用意している。

名称	個数	2016年度貸し出し回数
極北を生きる	2	20
アンデスの玉手箱	2	26
ジャワ島の装い	1	11
イスラム教とアラブ世界のくらし	1	15
ブータンの学校生活	1	8
ソウルスタイル	2	20
ソウルのこども時間	2	20
インドのサリーとクルター	2	20
プリコラージュ	3	3
アラビアンナイトの世界	2	19
アイヌ文化にであう	1	12
アイヌ文化にであう2	1	13
モンゴル	2	31
あるく、ウメサオタダオ展	1	5

●ワークショップ

2016年7月23日（土）に夏休み子どもワークショップ「カザフのひつじ ウズベクのひつじ——フィールドワークに挑戦！」を実施した。小学4～6年生を対象に参加者を募集し、13名が参加した。参加者は、展示場で調査したことや講師から聞いたことなどを報告書にまとめて発表した。

また、展示イベント「ハチュカル——アルメニアの十字架石碑をめぐる物語」（開催期間：2016年9月29日（木）～10月11日（火））に関連して、2016年10月9日（日）にワークショップ「ハチュカル——拓本づくりでまなぶアルメニア十字架」を開催した（参加者数19名）。

●ワークシート

テーマに沿って展示場を見学できるガイドマップ「みんなく見どころアラカルト」や、年末年始展示イベント「とり」（開催期間：2016年12月8日（木）～2017年1月24日（火））に関連して2017年1月9日（月・祝）に開催したイベント「みんなくでバードウォッチング！」で配布したガイドマップなどを本館のホームページ上に掲載し、ダウンロードして利用できるようにしている。

●みんなく春と秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス

春のガイダンス 2016年4月7日（木）、8日（金）

秋のガイダンス 2016年8月23日（火）、25日（木）

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春と秋に実施し、春には24団体80名、秋には28団体72名、計52団体152名の学校関係者が参加した。

当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、見学に関するさまざまな相談も受けた。

●職場体験

2016年10月18日（火）～11月18日（金）

学校教育及び社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2016年度は5校10名を受け入れた。

その他の事業

●「ミュージアムぐるっとバス・関西2016」

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話人会の一員として参画した。

●「音楽の祭日2016 in みんなく」

実施日：2016年6月19日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、当館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く当館を解放して開催することとなった。当日は26のグループや個人の演奏があった。

●展示場クイズ「みんなQ」

クイズ「みんなQ」は、展示を観覧しながら知識や興味を広げてもらおうと、クイズ形式で本館展示を楽しんでもらう企画である。

本館展示の新構築に合わせ、2016年7月21日（木）～8月23日（火）に「みんなQ 中央・北アジア編」、2016年12月15日（木）～2017年1月24日（火）に「みんなQ アイヌの文化編」を実施した。

●「みんなく×MBS ラジオ presents 浜村淳と美女がせまる！見世物大博覧会」

特別展「見世物大博覧会」の関連イベントとして、日本文化にも精通しているタレントの浜村淳さんと、MBSの若手アナウンサー2名、笹原亮二（本館教授・特別展実行委員長）によるトークイベント「みんなく×MBS ラジオ presents 浜村淳がせまる！驚きと幻想の見世物大博覧会」を開催した（参加者数446名）。

●カムイノミ

実施日：2016年12月1日

カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌ標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。従来は萱野 茂氏（故人、萱野茂二風谷アイヌ資料館前館長）によって非公開でおこなわれていた。2007年度からは、社団法人北海道ウタリ協会（現 公益社団法人北海道アイヌ協会）の会員がカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施し、2016年度は阿寒アイヌ協会の協力を受けた。

●北大阪ミュージアムメッセ

2016年11月19日（土）、11月20日（日）に、北大阪の8市3町の美術館・博物館の文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」を本館にて開催し、展示やワークショップ、楽器の演奏等がおこなわれた。

●連続講座「みんなく×ナレッジキャピタル」

一般社団法人ナレッジキャピタルとの間に取り交わした連携協力協定に基づき、グランフロント大阪において連続講座「みんなく×ナレッジキャピタル」を、上半期は「世界の『台所』」をテーマに、下半期は「展示キュレーションの誘惑——新しいみんなくの展示ができるまで」をテーマに合計14回（うち2回は展示ツアー）開講した。

ボランティア活動

「みんなくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自立的な組織として2004年9月に発足した団体である。

来館者からの要望に応じておこなう視覚障がい者に対する展示場案内や、学校団体に対する教育プログラム「わくわく体験inみんなく」、一般来館者向けのものづくりワークショップなど、多岐に広がる活動を本館との協働で進めている。また、館外でおこなわれるワークショップフェスやボランティア交流会にも積極的に参加し、他の博物館や施設との交流を広めている。

一般財団法人千里文化財団の事業

●国立民族学博物館友の会講演会（協力：国立民族学博物館）

◎大阪：国立民族学博物館 第5セミナー室（毎月第1土曜日開催）

第453回 「アイヌの衣服から見えてきたこと」【特別展「夷酋列像」関連】

2016年4月2日 講師 吉本 忍（民博名誉教授） 参加人数 55名

特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」に展示されていた最古の衣服資料を手がかりに、16、7世紀におけるアイヌの対外活動について紹介した。

第454回 「国境の地に生きる——フィンランド・カレリアとエストニア・セトゥの人びと」

【第87回民族学研修の旅関連】

2016年5月7日 講師 庄司博史（民博名誉教授） 参加人数 49名

国境により分断された人びとが暮らすカレリア地方、セトゥ地方に着目し、過疎化と多数派への同化の波のなか、伝統文化を維持し続けようとする人びとの姿を紹介した。

第455回 「シンドバード航海記の成立の謎を追って——中東地域の民衆文化研究への新視点」

【現代中東地域研究推進事業拠点設置関連】

2016年6月4日 講師 西尾哲夫 参加人数 41名

新しく発見された「シンドバード航海記」の「第七の航海記」の第三の写本を紹介するとともに、物語成立の謎をさぐった。

第456回 「中央アジアのイスラーム——ある家族の物語から」【新中央・北アジア展示関連】

2016年7月2日 講師 藤本透子 参加人数 55名

カザフスタンに暮らすある家族に注目し、世代や個人で異なるイスラームの受け止め方を比較しながら、中央ア

ジアにおけるイスラームの変容と継承のあり方について考えた。

第457回 「フィリピンから海外に向かう人びと——日本と韓国の事例を中心に」

2016年8月6日 講師 永田貴聖（民博機関研究員） 参加人数 22名

日本と韓国に住むフィリピン人移住者に注目し、コミュニティの活動や現地社会との関係構築のあり方について紹介した。

第458回 「ネパール、『市民社会』の再編を展望する」【第88回民族学研修の旅関連】

2016年9月3日 講師 南 真木人 参加人数 50名

1951年の「開国」以降、民主化やマオイストの台頭、王制の廃止など、節目のたびに社会再編の機運が高まりを見せたネパール。社会再編のいままでとこれからを概観した。

第459回 「見世物の昭和・平成——人間ポンプ・安田里美のライフストーリーから」

【特別展「見世物大博覧会」関連】

2016年10月1日 講師 鶴飼正樹（京都文教大学教授） 参加人数 51名

見世物小屋芸人・安田里美の生涯を追いながら、昭和・平成の見世物文化、「見せる側」からみた見世物興業の実態について紹介した。

第460回 「エジプトにおける空手道の新地平——大衆文化にさぐる中東のいま」

【現代中東地域研究推進事業拠点設置関連】

2016年11月5日 講師 相島葉月 参加人数 28名

中東地域を代表する空手大国、エジプト。宗教や政治的な動向ばかりが注目されがちな中東世界を大衆文化から紐解き、グローバル化するエジプト社会の動向を紹介した。

第461回 「インドにおける出産をめぐる信仰と産後ケア」

2016年12月3日 講師 松尾瑞穂 参加人数 30名

インドにおける出産は「けがれ」の観念と深く結びつく一方、病院出産の普及とともにその慣習は変化してきた。出産と産後ケアの変化を追い、インド社会への理解を深めた。

第462回 「アイヌ文化を楽しく学ぶ——関西での活動を例に」【新アイヌの文化展示関連】

2017年1月7日 講師 藤戸ひろ子（ミナミナの会代表）、齋藤玲子 参加人数 65名

アイヌ文化の普及・継承活動に携わる人物をゲストに迎え、大阪を拠点に展開する、手仕事や芸能など「体験」を重視した活動を紹介した。

第463回 「世界各地のイスラーム——みんぱくでその広がりを考える」

【現代中東地域研究推進事業拠点設置関連】

2017年2月4日 講師 山中由里子 参加人数 62名

中東では一神教が共存する一方で、布教活動や移住により、イスラームは世界各地に広がった。みんぱくの展示や教材をヒントに、各地のイスラームの在り方について考えた。

第464回 「パキスタン北西部の“異教徒”カラーシャ人」

2017年3月4日 講師 吉岡 乾 参加人数 55名

カラーシャ人の宗教や、それに基づく生活のあり方、使用言語について、周辺民族との関わりや歴史的な背景なども踏まえながら紹介した。

◎東京：モンベル渋谷店

第115回 「国境の地に生きる——フィンランド・カレリアとエストニア・セトゥの人びと」

【第87回民族学研修の旅関連】

2016年4月23日 講師 庄司博史（民博名誉教授） 参加人数 46名

国境により分断された人びとが暮らすカレリア地方、セトゥ地方に着目し、過疎化と多数派への同化の波のなか、

伝統文化を維持し続けようとする人びとの姿を紹介した。

◎東京：アイヌ文化交流センター

第116回 「『アイヌ・アート』をもっと身近に——イラストレーションから踊りまで」

【新アイヌの文化展示関連】

2017年1月9日

講 師 小笠原小夜（アイヌ文化交流センター非常勤職員、イラストレーター）、齋藤玲子

参加人数 55名

アイヌ文化の普及・継承活動に携わる人物をゲストに迎え、伝統を踏まえつつ、あらたな表現方法に挑戦する作家・アーティストたちの活動について紹介した。

◎東京：モンベル御徒町店

第117回 「異文化が交差する物語——アラビアンナイトからのぞく中東世界」

2017年2月25日 講師 西尾哲夫 参加人数 48名

ヨーロッパ人によって「発見」された物語、アラビアンナイトを通して、中東に向けられたまなざし、中東に暮らす人びとが育んできた文化や信仰心、世界観をさぐった。

●みんなく見学会（協力：国立民族学博物館）

第63回 特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」

2016年4月2日 講師 吉本 忍（民博名誉教授） 参加人数 52名

第64回 中央・北アジア展示

2016年7月2日 講師 藤本透子 参加人数 46名

第65回 特別展「見世物大博覧会」

2016年10月1日 講師 鶴飼正樹（京都文教大学教授） 参加人数 40名

第66回 アイヌの文化展示

2017年1月7日 講師 齋藤玲子 参加人数 60名

●体験セミナー（協力：国立民族学博物館）

第72回 「長良川鵜飼漁見学——鳥と語らい、川とともに生きる」

実施日 2016年7月14日～15日 [2日間・岐阜県]

講 師 卯田宗平

参加者数 20名

漁業技術や景観を包括して、ユネスコ文化遺産登録を目指す長良川鵜飼漁の文化的価値を糸口に、自然と人との関わりについて考えた。

第73回 「目と舌で知るネパール——映像鑑賞と国民食『ダール・パート』を手で食べる」

実施日 2016年9月30日 [東京都]

講 師 南 真木人

参加者数 26名

「食」と「映像」とをとおして、多様な民族が暮らすネパールの文化や人びとの価値観について理解を深めた。みんなく映像番組の周知をはかり、ネパールの30年の社会変化を紹介した。

第74回 「遠山霜月祭見学——神と人が集う夜」

実施日 2016年12月10日～11日 [2日間・長野県]

講 師 櫻井弘人（飯田市美術博物館学芸員）、吉田憲司

参加者数 18名

地域に密着した信仰と、日本古来の祭のあり方や文化継承について考えた。300近い面を保有することを踏まえ、

国内外の事例を比較しながら仮面の文化的意味も考えた。

●民族学研修の旅（協力：国立民族学博物館）

第87回 「フィンランドとエストニアの原風景に出会う——森の恵みと唄を愛する人びとを訪ねて」

実施期間 2016年8月1日～9日 [9日間・フィンランド、エストニア]

講師 庄司博史（民博名誉教授）

参加者数 24名

フィンランド東部のカレリア地方、エストニア南東部のセトゥ地方。両地域では、民俗文化や宗教面でロシアの影響が見られるとともに、両国にとって周縁の地であるがゆえに独特の文化がのこっている。両地域を訪ね、境界に生きる人びとについて考えた。

第88回 「多民族国家ネパールの生活文化にふれる旅：映像がつなぐ人びとを訪ねて」

実施期間 2017年1月8日～15日 [8日間：ネパール]

講師 南 真木人

参加者数 20名

標高差のある自然と多様な価値観をもつ人びとがすむ国ネパール。みんぱく映像番組の取材先とさまざまなかたちでネパールに携わる在住日本人を訪ねながら、都市と地方、山地と平地を移動し、ネパール社会の諸相をさぐった。

●午餐会（協力：国立民族学博物館）

第201回 「なぜ日本食が世界にひろがったか」

2016年10月13日 参加者数 29名

講師 石毛直道（民博名誉教授）

「和食」の世界文化遺産登録を踏まえ、日本の食文化がどのように海外各地で受け入れられているのかを紹介した。

●『季刊民族学』（国立民族学博物館友の会 機関誌）

協力：国立民族学博物館

編集・発行：千里文化財団

156号：「かつての朝食——フィリピン食文化の変容と普遍」ほか（2016年4月25日発行）

157号：特集「信州の山」ほか（2016年7月25日発行）

158号：「二一世紀モンゴル民族衣装考（前編）甦る大モンゴル帝国の栄華？」ほか（2016年10月25日発行）

159号：特集「日本酒 古今東西」ほか（2017年1月25日発行）

●連続講座（協力：国立民族学博物館）

タイトル：素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク

◎東京：モンベル渋谷店

第1回 「南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き」

2016年6月11日 講師 印東道子 参加人数 31名

ミクロネシア・フェイス島における発掘調査を紹介するとともに、島嶼居住の戦略のひとつに島嶼間のネットワーク構築が鍵になることを明らかにした。

第2回 「人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える」

2016年9月10日 講師 池谷和信 参加人数 38名

短い雨季をのぞけば、地表水を得ることが難しいカラハリ砂漠。“砂漠の水がめ”スイカをとおして、カラハリ狩猟民サンの生活とその調査を紹介した。

第3回 「シベリアで生命の暖かさを感じる」

2016年11月12日 講師 佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹） 参加人数 31名

マイナス40度の極寒世界で人はどのように生きるのか。シベリアやロシア極東、中国東北部の遊牧民・狩猟民を追った30年の調査を紹介した。

●みんぱくに集積された資料と情報を活用した出前授業プログラム

2016年9月3日

実施場所：相楽東部広域連立笠置小学校

プログラム内容：オーストラリアのブーメランをとばそう

参加人数：15名（内訳：1年生～6年生10名、大人5名）

●巡回展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

名称：瀬戸内国際芸術祭2016連携事業

「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

会期：2016年10月8日～11月27日 51日間

会場：香川県立ミュージアム（〒760-0030 高松市玉藻町5番5号）2F 特別展示室

企画：国立民族学博物館、国立新美術館、日本文化人類学会

入場者数：7,163人

〈関連企画〉

1) 開会式・内覧会

日時：10月7日

会場：2階西側ロビー

参加者：75名

2) 講演会「イメージの力をさぐる——国立民族学博物館から」

講師：吉田憲司

日時：10月8日

会場：香川県立ミュージアム 地下1階 講堂

共催：国立民族学博物館友の会

聴講者：143名

3) ワークショップ「キラキラ☆光の力——インドの伝統ミラー刺繍にチャレンジ!」

講師：上羽陽子

日時：10月23日

会場：香川県立ミュージアム 地下1階 研修室

対象：小学生5年生以上

参加者：26名

4) フリーワークショップ「ビックリ!仮面づくり」

日時：11月3日、12日、13日

会場：香川県立ミュージアム2階 西ロビー

参加者：計197名

5) ミュージアムトーク

日時：10月30日、11月20日

会場：香川県立ミュージアム2階 特別展示室

参加者：計38名

6) ナイト・ツアー

日時：10月21日、11月4日、11日、18日、25日

会場：香川県立ミュージアム2階 特別展示室

参加者：計45名

7) LAST ツアー

日時：11月27日

会場：香川県立ミュージアム2階 特別展示室

参加者：23名

●カレッジシアター「地球探究紀行」の開催協力

会場：あべのハルカス近鉄本店ウイング館9F「スペース9」（大阪市阿倍野区）
主催：産経新聞社
共催：近鉄文化サロン、スペース9
特別協力：国立民族学博物館、千里文化財団

- 2016年4月13日 「身をもって知る技法——マダガスカルの漁師に学ぶ」
講師：飯田 卓 参加人数：48名
- 2016年4月27日 「インド染織の現場——つくり手たちに学ぶ」
講師：上羽陽子 参加人数：44名
- 2016年5月11日 「クジラとともに生きる——アラスカ先住民の現在」
講師：岸上伸啓 参加人数：51名
- 2016年5月25日 「言葉から文化を読む——アラビアンナイトの言語世界」
講師：西尾哲夫 参加人数：44名
- 2016年6月8日 「人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える」
講師：池谷和信 参加人数：52名
- 2016年6月22日 「仮面の世界をさぐる——アフリカとミュージアムの往還」
講師：吉田憲司 参加人数：43名
- 2016年7月13日 「コリアン社会の変貌と越境」
講師：朝倉敏夫（民博名誉教授） 参加人数：44名
- 2016年7月27日 「城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す」
講師：宇田川妙子 参加人数：41名
- 2016年9月14日 「音楽からインド社会を知る——弟子と調査者のはざま」
講師：寺田吉孝 参加人数：37名
- 2016年9月28日 「大地の民に学ぶ——激動する故郷、中国」
講師：韓 敏 参加人数：30名
- 2016年10月12日 「身体でみる異文化——目に見えないアメリカを描く」
講師：広瀬浩二郎 参加人数：42名
- 2016年10月26日 「アンデスの文化遺産を活かす——考古学者と盗掘者の対話」
講師：關 雄二 参加人数：36名
- 2016年11月9日 「西アフリカの王国を掘る——文化人類学から考古学へ」
講師：竹沢尚一郎 参加人数：39名
- 2016年11月30日 「ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界」
講師：信田敏宏 参加人数：33名
- 2017年1月11日 「タイワンイノシシを追う——調査で出会う食文化」
講師：野林厚志 参加人数：34名
- 2017年1月25日 「アンデスの聖地をめぐる」
講師：八木百合子（民博機関研究員） 参加人数：40名
- 2017年2月8日 「スリランカで運命論者になる——仏教とカーストが生きる島」
講師：杉本良男（民博名誉教授） 参加人数：46名
- 2017年2月22日 「ブタを連れて海を渡った人たち——ミクロネシアの発掘調査から」
講師：印東道子 参加人数：37名
- 2017年3月8日 「南太平洋の伝統医療とむきあう——マラリア対策の現場から」
講師：白川千尋（大阪大学教授） 参加人数：31名
- 2017年3月29日 「小さなビーズがつくりだす世界——アフリカ、アジア、そしてアメリカ」
講師：池谷和信 参加人数：36名

●その他、普及活動

- ① 国立民族学博物館オリジナルグッズの制作及び頒布
ピンズ「羊と少年」、マスキングテープ（新色）、

あいさつスタンプ（ロシア語、カザフ語「こんにちは」・「ありがとう」）

特別展「見世物大博覧会」関連グッズ：クリアファイル「おもちゃ絵」「錦絵・象の興行」、
Tシャツ（2色）、人間ポンプ柄Tシャツ

特別展「ビーズ」関連グッズ：カットソー、キャップ、キャンバスバッグ、
クリアファイルビーズ資料3種、民族衣装型抜き絵はがき3種

② 2017年度国立民族学博物館オリジナルカレンダー「BEADS」の制作及び頒布

③ 外部連携事業

1) ジュンク堂書店「みんなくブックフェア」での委託販売

会 場：ジュンク堂書店 大阪本店 3F

期 間：2016年5月9日～7月10日

2) 夏のインテリアスタイル「フォークアートと暮らす」での出張販売

会 場：阪急うめだ本店 9階祝祭広場

期 間：2016年5月25日～5月30日

3) 東急ハンズ京都店「みんなくがやってきた!!」での委託販売

会 場：東急ハンズ京都店 1階

期 間：2016年7月19日～8月9日

4) 三省堂書店神保町本店「みんなくブックフェア」での委託販売

会 場：三省堂書店神保町本店

期 間：2016年7月25日～8月31日

5) 巡回展「イメージの力」での委託販売

会 場：香川県立ミュージアム

期 間：2016年10月8日～11月27日

6) 巡回展「見世物大博覧会」での委託販売

会 場：国立歴史民俗博物館

期 間：（1期）2017年1月17日～3月20日、

（2期）2017年4月18日～7月17日

7) みんなくフェアへの協力

内 容：ショップで販売している民族楽器の展示と民博およびショップの紹介

会 場：ららぽーと EXPOCITY内 Inforest すいた

期 間：2016年9月1日～10月31日

参加人数：9月17,007人、10月16,803人